



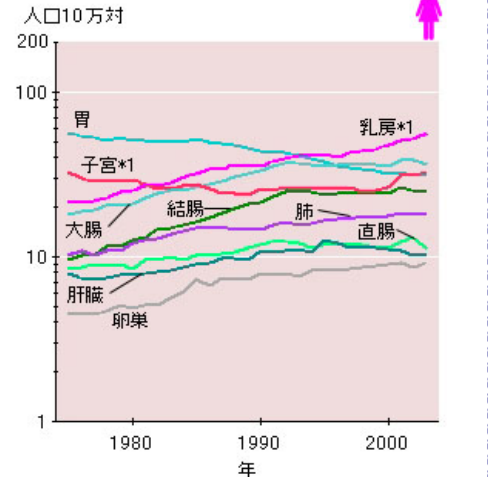
子宮頸がん 検診率2割 ~ 11月は子宮頸がん月間~

地域がん登録全国推計値によると、近年子宮頸がんの発症率は増加し、なかでも20~30歳の女性における増加が著しい。1990年代に入ってから各種がんのなかでも最も高くなっている。子宮頸がんの検診は、きちんと受け続ければ効果が期待できるが、全国の受診率は2割程度と低いのが現状。今年から11月を「子宮頸がん月間」と日本対がん協会は位置づけた。

子宮頸がんは、膣の奥にある子宮の入り口で起こる。検査方法は、子宮の入り口付近を医師が専用のブラシでこすって細胞を採取。細胞を薬品で処理した検体を顕微鏡で観察し、がんになっている異形成の細胞有無を点検する方法だ。正常な細胞ががん細胞に変わったり細胞核の数が変わるなど、段階を経て変化する。この途中段階を、軽度、中等度、高度に分類。軽度と中等度は8割以上が正常に戻るとされ、経過観察となる。高度の場合は、がんに進行する恐れが高いため、子宮の入り口の一部を切除する円錐切除をするのが一般的だ。円錐切除の場合、妊娠・出産にも支障はない。浸潤がん 진행된場合、子宮を全摘出することになる。よって、できるだけ早くがんを見つけることが最良の策だ。

子宮頸がんはヒト・パピローマ・ウイルス（HPV）の感染がリスク要因といわれ、わが国でも近い将来、ワクチンが認可される見込みだ。しかし100%の予防はできない。20歳以上の女性は2年に1度、子宮頸がん検診を継続して受けることを習慣にしよう。

部位別がん年齢調整罹患率の推移
(主要部位・対数)
[女 1975年~2003年]



*1乳房と子宮頸部の上皮内がんを含む。
*子宮は、子宮頸部および子宮体部の他に「子宮部位不明」を含む。
資料：国立がんセンターがん対策情報センター
Source: Center for Cancer Control and Information Services,
National Cancer Center, Japan

腹7分目は長寿の極意



アメリカのウィスコンシン大学ではアカゲザルの実験により、摂取エネルギーを約3割減らすと、糖尿病やがんなどの加齢に関連した病気で死ぬ確率が3分の1に減ることが20年間の実験でわかり、米科学誌サイエンスに発表した。

アカゲザルを好きなだけ餌を食べさせるグループと摂取エネルギーを制限したグループに分けて飼育。飼育中に死んだサルを解剖して調べた結果、糖尿病やがん、心血管疾患、脳の萎縮など加齢性の病気で死んだサルの割合が、好きなだけ餌を食べさせたサルは摂取エネルギーを制限したサルの3倍に達していた。

摂取エネルギーの制限により老化を防げることは線虫やショウジョウバエやマウスでは今までに確認されているが、霊長類ではわかっていなかった。

この実験から、サルがエネルギー制限をすることで加齢性の病気の発病を減らし、老化を遅らせることができたとしている。エネルギー制限で寿命が延びる仕組みはまだ不明だが、糖代謝の機能改善が関わっていると考えられている。



(2009.7.13 朝日新聞より)

総合健診センター ヘルチェック

横浜東口センター	〒221-0056	横浜市神奈川区金港町6-20
横浜西口センター	〒220-0004	横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル3F
レディース横浜	〒220-0004	横浜市西区北幸1-4-1 横浜天理ビル23F
ファーストプレイ横浜	〒220-0011	横浜市西区高島2-7-1 ファーストプレイ横浜6F
新宿西口センター	〒160-0023	東京都新宿区西新宿3-2-4 新和ビルディング7F
予約センター	東京 03(3345)7766	
	横浜 045(453)1150	



顧客健康支援室